

# ピーター・パン

中谷宇吉郎

青空文庫



ディズニイの『ピーター・パン』は、日本でもだいぶ好評だったらしいが、アメリカでも、たいへんな人気であった。普通アメリカでは、相当評判のよい映画でも、映画館の前に、行列を作るということは、滅多にない。しかしディズニイの長篇物は例外であつて、その行列がけっして珍しくない。

『ピーター・パン』の場合も、そうであつた。最初の上映以来数カ月経つて、郊外の二流館、三流館へ廻つてきた頃になつても、やはり子供たちは、長い行列を作つて、開館の時刻を待っていたものである。小学生のうちの末娘などは、六回か七回くらいも見たようであつた。同じ学校の友だち連中は、誰も彼も皆それくら

いは見ているというので、まあしかたがないということにしておいた。

先日の日曜に、一年ぶりで、また札幌でこの映画を見たが、あいかかわらずおもしろかった。それに、日本へ帰ってから、見直したせいかもしれないが、この映画には、日本の昔の武士道的な性格が、その根柢に強くくいつているような気がして、とくに印象が深かった。もつとも、それは西洋風な騎士道の精神であって、日本の武士道の一つの面が、それと似たものであるということかもしれない。

この映画の筋は、原作とはだいぶちがうが、要するに、永遠の子供の表徴であるピーター・パンと、悪の権化ともいべき海賊

の首領フック船長との戦いに、ピーター・パンが遂に勝つというところに、話の山がある。

フック船長は、人を殺すことなどは、なんとも思わない兇悪な男で、力も非常に強い。しかし精神は弱い。ピーターは、自由に空を飛び廻れる敏捷な子供で、力は強くないが、高い精神をもっている。海賊船の上でのフック船長との最後の決戦で、業を煮やしたフック船長が、「空を飛んで逃げてばかりいるのは卑怯だぞ」と、どなる。ピーターは「なに、卑怯だって。それならもう飛ばない」と言いきってしまう。それから、帆柱の横桁の上での血戦になるわけであるが、フックの長刀に切りまくられたピーターは、桁のどんじりに追いつめられ、おまけに唯一の武器たる小刀

まで打ち落されてしまう。絶体絶命の境である。ロンドンから一緒に飛んできた子供たちの一人、ウエンデイが、帆柱の上から「ピーター、飛びなさい。飛びなさい」と絶叫する。しかしピーターは「私は約束した」と言つて、断乎として踏みとどまる。

これがアメリカにおける初等教育の基本である。小学校における六年間の教育には、四つの基本線があるようである。第一は、「嘘をつかない」という教育を、躰として身につけさせること。第二は、それと関連しているが、約束は絶対を守ること。このプロミスという言葉には、誓ちかの意味が、たぶんに含まれている。「アイ・ゲヴ・マイ・ウワーズ」した以上、それは取り戻せない

ことなのである。

第三は、フロンティア・スピリット開拓精神を失わないこと。百年前のアメリカ

は、今日とはまるで国の姿がちがっていた。東部に入植した歐洲人たちは、大西洋に面した一つの国をつくっていただけである。

それが一八四九年のゴールド・ラッシュの浪に乗って、中西部の沙漠地帯を越えて、太平洋岸に進出してきて、今日の両大洋に面した大国をつくりあげた。道もなく水もない炎熱の沙漠で、この開拓者たちは、非常に苦しい生活に耐え、自然の猛威と戦った。

この精神の一つのあらわれとして、「卑怯」をなによりも蔑いやしむ気風が生れた。今日のいわゆる西部劇には、野蛮な面も、殺伐な面も大いにあるが、開拓精神を失うまいとする意図が働いている

点を見逃してはならない。第四は、弱い者を徹底的にいた勞わるとい  
う教育である。『ピーター・パン』の中には、この点も、巧く織  
りこんである。

絶体絶命の境地に追いつまされたピーターが、最後の瞬間に、フ  
ツクの長刀を奪い取り、形勢は逆転する。今度はフツクが、帆柱  
のところを追いつめられ、今やピーターの一撃のもとという窮地  
におちいる。するとフツクは、もう恥も外聞もなく、手を合わせ  
て「なんでもお前の言うとおりにするから、生命だけは助けてく  
れ」と、ひたすらに頼みこむ。

この前に、フツクは、偽手紙をつけて、ピーターに爆弾を送つ  
て、殺そうとしたこともあり、インディアンの酋長の可憐な娘を

海中に沈めようとしたこともある。あらゆる兇悪かつ卑劣きわまる悪業の数々を重ねている。その酬いを、ここでフツクに思い知らすわけであるが、ピーターの要求は、フツクに「私は卑怯者だ」と言えというのである。さすがのフツクにも、これはこたえるらしいのであるが、とうとう渋々「私は卑怯者だ」と言つてしまう。「もつと大きい声で言え」とピーターにどなられて、自暴<sup>やけ</sup>くそな顔付きで、大声に「私は卑怯者だ」と答え、それで許して貰うわけである。

この場面を見ているうちに、私はふと、西鶴だったかで読んだ、文章の一つを思い出した。前後のことは忘れたが、ある武士か浪人かが、金を借りる時に、もし返済しなかった場合には、「人前

でお笑い下されても苦しからず候」という風なことを言っている。人前でお笑いになつてもよいというのが、判をいくつ押した証文よりも確かであつた時代が、日本にもあつたのである。もちろん徳川時代の日本人が、皆そうであつたわけではない。しかしそういう道徳観、というよりも、むしろ性格をもつた日本人が、相当数いた時代もあつたわけである。

こういうことを言つても、私はなにも昔の武士道にまで、日本の国をかえせというのではない。しかしアメリカの子供たちの間に、あれだけ人気のあつた『ピーター・パン』の最後の山のところで、昔の日本の武士道的性格が、躍如として出てきたことは、まことに意外であつた。そしてそれが素直に子供たちに受けいれ

られているのだったとしたら、これは注目に値することである。

この話は、『ピーター・パン』の映画の批評ではない。映画としては、もっとたいせつな面がたくさんある。なによりもこの映画には、美しい画面が、ほとんど無数にある。芸術でも、学問でも、美しいということが、最高の要素であつて、美しくないものに、良いものはけつしてない。

画面が美しいばかりでなく、その中に盛られている精神がまたきわめて美しい。そしてその美の世界の中に、少年の日の夢が、巧みに織りこまれて、見る人の心に、永遠の童心を蘇らせ、夢幻の世界に、人の心を導いていく。しかしそれだけに、この映画が終っていないところに、注目すべき点がある。「私はコツドだ」

と、人前で言わされることは、ピーターなどにとっては、死刑に匹敵する残酷な刑罰である。しかしある種の間人には、このことがそれほどには感ぜられない。少なくとも海賊フックにとっては、そうであった。

こういえば最高の人生の教義が、「人魚の池」に群る美しい人魚たちの遊びの場面、テインガー・ベルが黄金の粉をふりまきながら、空中を遊行する場面などと融合して、なんらの無理を感じさせない。そして子供たちは、ある時は固唾をのみ、かたずある時は歓声をあげる。そして五へんも六ぺんも、くり返してこの映画を見に行く。それは単に、この映画が良くできているという言葉だけで片付けては、少し不十分である。この映画の生れた国、す

なわちアメリカにおけるいっばんの教育目標が、この映画の目ざすところと一致しているという点も、見逃すことはできない。子供は純真であつて、学校で毎日受けている教育の動向に、すぐ適応してしまうからである。

もちろん現在のアメリカにおける教育がぜんぶ、前に言つたような四つの基本線に沿つて進められ、それがことごとく成功しているとは思われない。しかしそういう線を、少なくとも目標としている点については、自分の子供を通じての体験から見て、間違いないように思われる。

こういうはつきりした目標をもつた義務教育を受けて、高等学校へはいる。そこでは学問に対する訓練が始められる。そして大

学に進む頃から、青年としての生活が始まる。青年の定義はむづかしいが、アメリカでは、これを単純に割りきっているように見える。すなわち二十一歳の成年をもって、子供は親から独立することになっていく。そしてこの独立によつて、一人前の青年になるわけである。

この独立の觀念が、まことにはつきりしているのであつて、たとえば、子供が二十一歳以上になると、原則として学資などは、親が出さない習慣になつていく。それで大学の学生は、たいてい二十一歳以上であるから、ほとんどぜんぶ、自分の学資は自分で稼いでいるといつていい。稀れには授業料を親から貰つている学生もあるが、それは例外的な存在である。これは貧富の問題では

なく、社会通念の問題なのである。たとえば、クリスマスに子供に自動車を買ってやっても、それは親からの贈<sup>プレゼント</sup>物であつて、その程度の金持の息子でも、学資はアルバイトをして自分で稼いでいる。そういう実例が、身近なところにも一つあつた。

授業料は、官立大学を除いては、いっばんに非常に高い。アメリカでは有名な大学は、ほとんどぜんぶ私立であつて、いわゆる良い大学へはいろいろと思えば、普通一年に七百五十ドル（二十七万円）の授業料を払わねばならない。それで授業料だけでも稼ぎ出すことは、たいへんな仕事である。

もつとも夏休みが三カ月あつて、その間みつしり働けば、この程度の金の手にはいるのであつて、またそういう仕事は、労働さ

えいとわなければ、だいたいいつでもある点が、日本とは事情がちがっている。その点は羨しい国であるが、いっぽう厳しい学年試験をやつと済ませて、一息つく間もなく、また直ぐ夏休みの労働に、朝の七時から、一分の遅刻も許されなくて、出かけて行くことは、そう楽ではない。とくに富裕な家に育つた子供には相当の苦行であろう。「アルバイトの口はいくらもあるのだから、楽な国だ」というのは、盾の片面しか見ない話である。

同じようなことは、奨学金についてもいえる。アメリカには、奨学金がたくさんあるので、それを貰えば、大学へ行くのも楽だ、という風に、考えられがちである。しかしこれ等の奨学金の多くは、大学院学生に与えられるもので、カレッジ新制大学の学生が、十分な

額の奨学金を貰うことは、非常にむづかしい。たくさん種類はあるが、中には年額三十五ドルというような極端なものまである。ほぼ授業料の全額に相当する金額をくれる、いわゆるフル・スカラー奨学金シップを貰うためには、ストレート・A全優の成績をとらなければならぬ。各学年に数名の程度であつて、日本の昔の特待生みたようなものである。それで全額奨学金をもらうためには、普通毎晩十二時迄、試験の時には徹夜というような勉強をずっと続けなければならない。要するに、このほうも自分の力で「稼ぎだす」ものなのである。

奨学金は、「成績」で買うものであつて無料ただで貰うものではない。その証拠には、いちど奨学金を貰つても、成績が落ちれば、

来年はさっさと打ち切られてしまう。ひどい場合には、学年の途中でもうち切られることがある。一年分の金額を、学年初めにくれるのではなく、三分の一宛を毎学期の初めにくれるのであるから、学期試験の結果によつては、途中でうち切ることもできるわけである。もちろん少しは人情も入れてくれるが、日本の場合に比べれば、ほとんど非人情的に「処理」してしまうといつていい。根本の考えかたがちがうのであつて、善悪の問題ではない。

アルバイトにしても、奨学金にしても、自力で稼いだすものである。そして自家の貧富とは関係なく、自分の費用は、自分で稼いだすものと、思いこんでいる。この考え方の根源には、一人立ちをしている人間という觀念が、確乎として存在している。そし

てその観念は、ピーター・パン的な精神を、幼い頃から培うこと  
によって生れてくるのではないかと思われる。

(昭和三十年六月)



# 青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎集 第八卷」岩波書店

2001（平成13）年5月7日第1刷発行

底本の親本：「黒い月の世界」東京創元社

1958（昭和33）年7月5日刊

初出：「新潮 第五十二卷第六号」

1955（昭和30）年6月1日発行

※初出時の表題は「ピーター・パン〈青年の役割〉」です。

入力：kompass

校正：岡村和彦

2017年4月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ピーター・パン

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>